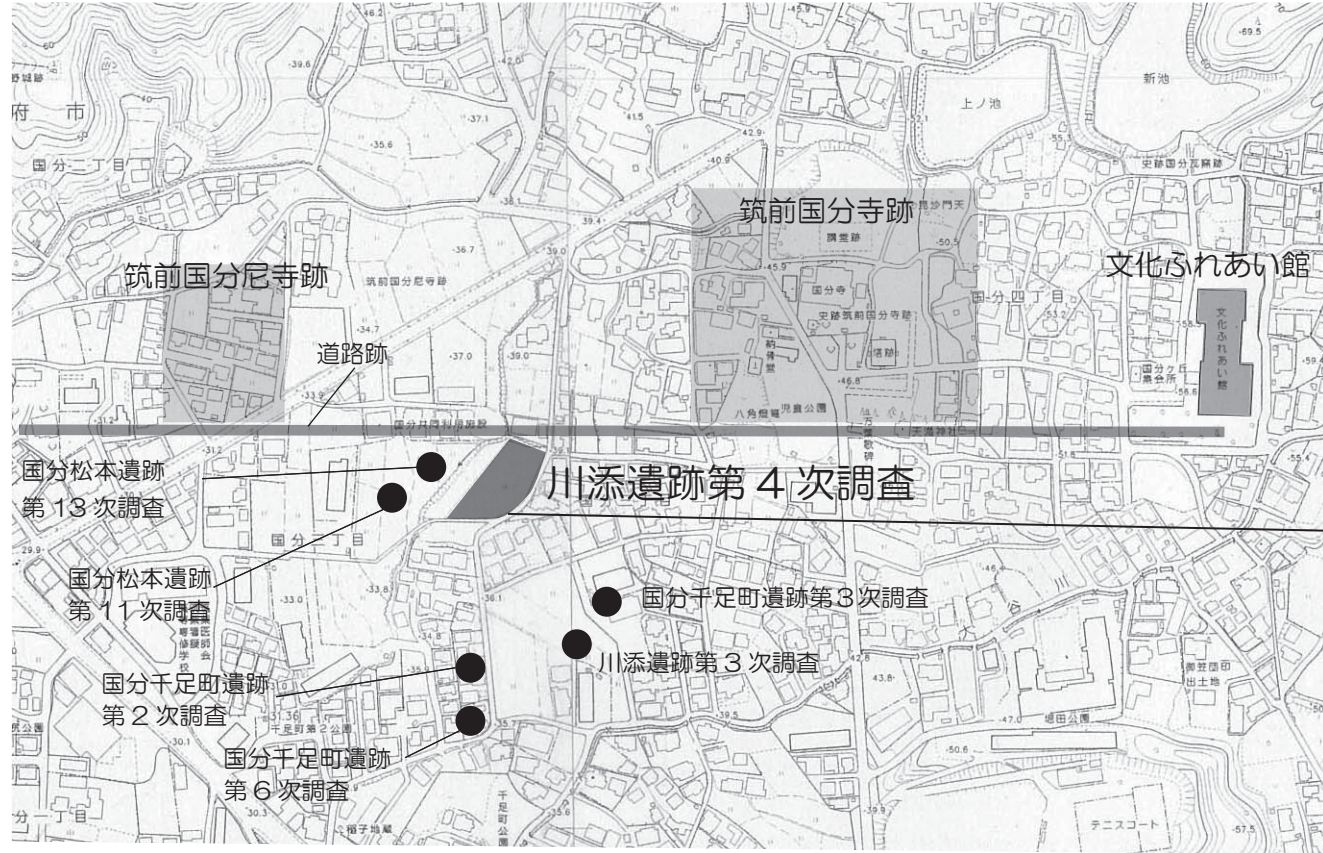


8～9世紀代の建物跡と地鎮遺構を発見

かわぞえ いせき

川添遺跡第4次調査 現地説明会資料

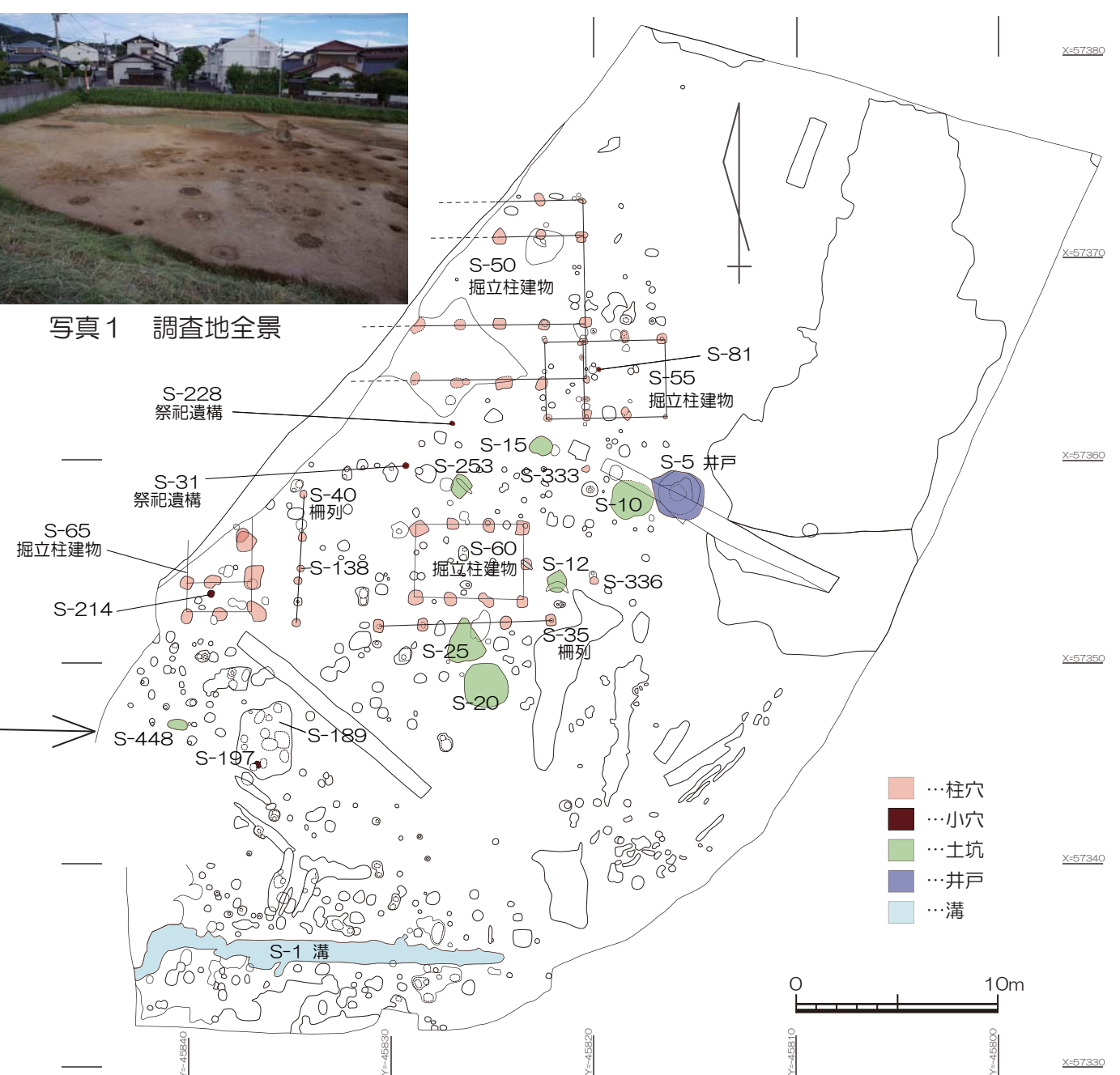
発掘調査の概要



第1図 調査地位置図 (S=1/5,000)



写真1 調査地全景



第2図 遺構配置略図 (S=1/300)

1、遺跡の位置と歴史的環境

川添遺跡は、四王寺山の南西麓に広がる扇状地の中程に位置します。調査地の北東側には天平13(741)年に聖武天皇の詔によって全国に建立された国分寺の一つである筑前国分寺跡(国史跡)、北西側には筑前国分尼寺跡があります。その南には道路が東西に通っており、水城東門跡からのびる官道と接続します。調査地の西隣には戸籍・計帳関係の木簡が出土した国分松本遺跡(第13次調査)が位置し、木簡の出土から周辺に筑紫大宰または筑前国府に関連する施設があったと考えられています。南側には国分千足町遺跡があり、この第2次・第3次調査では8世紀代の掘立柱建物がみついているほか、第6次調査では鉾や鋳型、炉壁といった鋳造関連遺物・遺構を確認しています。その他、川添遺跡の第3次調査では8～9世紀代の柱穴や南北にのびる溝を確認しています。

今回の調査では、奈良・平安時代を中心とした建物跡と、弥生時代の土器や石器など、生活の跡がみついています。

遺跡名	川添遺跡第4次調査
所在地	太宰府市国分三丁目地内
調査期間	2022年4月～2023年3月
調査主体	太宰府市教育委員会
主な遺構	掘立柱建物、柵列、井戸、溝、土坑
主な遺物	円面硯、銅銭(皇朝十二銭)
遺跡の時代	弥生時代、奈良・平安時代(8世紀～)

2、発掘調査の成果

弥生時代

弥生時代の遺構は、小穴(S-81・S-214・S-197)、土坑(S-10)がみつかれています。いずれも弥生時代中期のもので、今から約2000年前頃のものと考えられます。



写真2 S-214 土器出土状況



写真3 S-81 出土磨製石鏃

弥生時代の土器や石器、生活の跡が周辺でも見つかり、この頃から国分地区に人が生活していたことが分かっています。



奈良・平安時代

ほったてばしらたてもの 掘立柱建物・土坑・井戸・溝のほか、^{さいし}祭祀遺構が見つっています。時代については、出土遺物から8世紀から9世紀ごろのものと考えられます。以下、おもな遺構を紹介します。

• 掘立柱建物 (S-50・55・60・65)

掘立柱建物は4棟見つかり、このうちS-50は南北に^{ひさし}庇がつく大型の掘立柱建物であることがわかりました。S-55はS-50と重複した南北1間、東西3間の建物で、建物内部に柱穴が確認でき、内部の空間を区切るための間仕切りが設けられた建物であることがわかりました。また、同規模のS-60が南側で、その西側にS-65が確認されています。S-65以外は東西方向にのびる建物であることがわかりました。



写真4 S-50 掘立柱建物 西から

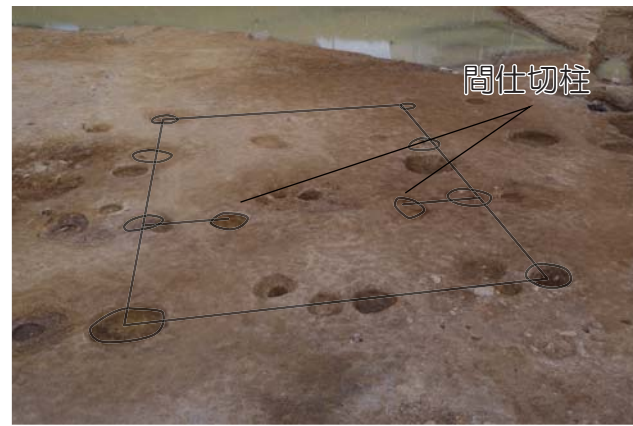


写真5 S-55 掘立柱建物 西から

• 井戸 (S-5)

一辺約1mの平面方形の井戸です。内部には当時の井戸枠が残っていました。井戸枠は板材を横に設置し、枠が内側に倒れないように横木が設けられていたようです。出土遺物から9世紀代の遺物が見つかり、この頃には井戸は埋まっていたようです。



写真6 S-5 井戸掘削状況 南から

• 溝 (S-1)

東西方向にのびる溝です。約18mの長さがあり、調査地外にのびていきます。場所を区切るための溝と考えられます。



写真7 S-1 溝検出状況 西から



• ^{さいし}祭祀遺構 (S-31、228)

祭祀遺構は2基確認しています。どちらも地面に小穴を掘って銅銭を納め、土師器の器でかぶせた状態で見つかりました。S-31では2個体分の銅銭が見つかり、断片から「隆」と「平」が確認でき、「^{りゅうへいえいほう}隆平永宝」であることがわかりました。

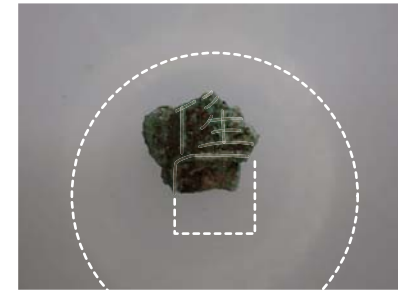


写真8 S-31 出土銅銭「隆平永宝」の「隆」断片

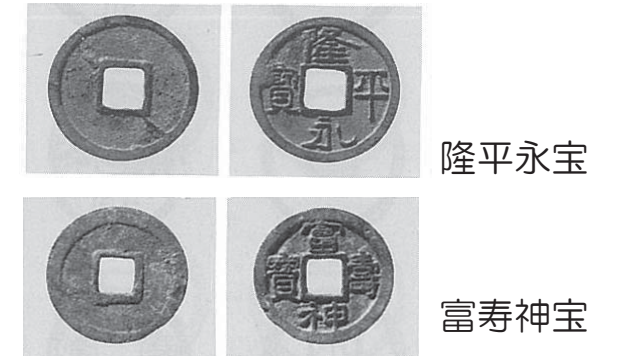


写真9 S-228 出土銅銭「富寿神宝」

S-228は残存状況が良く3個体の銅銭が確認でき、このうち一枚は「^{ふじゅしんぼう}富寿神宝」であることがわかりました。銅銭は皇朝十二銭に含まれるもので、遺跡の年代や性格を考える上で重要な資料です。

今回見つかった遺構は、どちらも掘立柱建物の近くで確認されたことから、^{じちん}地鎮に関係するものと考えられます。

皇朝十二銭…8世紀～10世紀中頃までに国が発行した12種類の銭貨です。
 「隆平永宝」…延暦15(796)年
 「富寿神宝」…弘仁9(818)年
 ※ 年次は初めて造られた年を示します。



(参考) 宝満山上宮祭祀遺跡出土銅銭

3、出土遺物

• ^{えんめんけん}円面硯

奈良時代に使用された硯で、^{すすり}円面硯と言います。円形の硯に台がついたような形をしています。脚部の破片が土坑(S-12)から見つかりました。硯の出土により、文字を扱う施設が近くにあったことが考えられます。



(参考) 円面硯復元品



写真10 S-12 出土 円面硯

• ^{じゅうきゃくへん}獣脚片

動物を脚を模ったものの一部です。欠損部の付近には線刻が見られ、^{ひざ}脛には大きな円形の透かしがあります。また、爪先にも小さな穴があげられています。脚は短く平たい爪先をしている形から、亀を模しているものと考えられます。

大変珍しく、大宰府では初めて出土しました。平城京に類例があり、^{すすり}亀形の硯(形象硯)の可能性がります。



写真11 S-189 出土 獣脚片

4、まとめ

今回の調査では、8～9世紀代の建物が計画的に並ぶだけでなく、硯が出土したほか、祭祀遺構より皇朝十二銭が見つかったことから、古代の役所に関連する施設があったことがわかりました。